

# 人間の内面を表現する手段として アニメーションには可能性がある



九品仏の住宅街の一角。陽光が差し込むアトリエには大きな木製のデスクが置かれ、何十種類もの絵の具や色鉛筆、絵筆がきちんと整理されて並んでいます。この想像の余地溢れる空間が、世界中にファンを持つ、アニメーション作家で絵本作家でもある山村浩二さんの仕事場です。

山村さんの名前を世界中に知らしめたのは2002年の短編アニメーション作品「頭山」（あたまやま）。偏屈な中年男がサクランボの種を食べたところ、頭から桜の木が生えてきて、花見客が頭上に押し寄せるという、落語をベースにしたストーリー。この作品中に、制作当時山村さんが暮らしていた千歳烏山の風景が登場します。「頭に生えた桜の木は八間通りにあつ

たしだれ桜で、何度かスケッチに通いました」（残念ながら現在はありませぬ）。駅前の開かずの踏切も出てきます。第75回アカデミー賞®短編アニメーション部門ノミネート作品は、実は世田谷ゆかりのお話だったのです。

山村さんが初めてアニメーションを作ったのは何と13歳の時。「今思えば早熟でしたね（笑）。思春期に自分の中にある思いを表現する方法として、当時興味のあったアニメーションを選びました。大学時代に実写映画も撮ってみたのですが、やはり自分はアニメーションに魅了されていると感じて、以来ずっと作り続けています」。プロになり、TVコマーシャルや子供番組の映像作品、絵本の制作など、依頼された仕事をこなす多忙な日々。その傍ら心の中にある大きなテーマに向き合いながら、誰からもオファーはされていないけれど、どうしても作りたい作品をこつこつ制作します。それが「頭山」に結実しました。約10分の作品の制作に6年かかったそう。そこに込められた思いは「自分がいま生きているとはどういうことなのか」。長い制